

# 金澤文庫資料における明恵の教學

納 富 常 天

金澤文庫には約二萬冊に及ぶ中世關係の佛典を所藏しているが、その中にはわずかではあるが明恵關係の資料がある。ここではこれ等の資料を列擧し、更にその中特色あるものについて概説し、最後にこれ等の資料の流入経緯等からして、その受容の實態を概観することにした。

資料には明恵自身のもの、遺弟等に關係あるものがあるから區別して擧げる。

始めに明恵に關する資料であるが、華嚴入法界頓證毗盧遮那字輪瑜伽誦次第第一卷一冊・佛眼佛母如來念誦次第第一卷一軸・加持溫病法一卷一帖・華嚴五教章指示零本二卷二冊・華嚴經文義綱目一卷一帖・三時禮釋一卷一冊・自行三時禮功德義一卷一冊・華嚴佛光三昧觀祕寶藏一卷一冊(三部)・光明眞言法一卷一冊・持戒清淨印明一卷一冊・善知衆藝童子法一卷一軸・華嚴經中唯心觀行式一卷一冊・阿留邊幾夜宇和附房中護律儀一卷一冊の十三種を擧げることが出来る。

次に遺弟即ち喜海・高信・定眞・覺信・聖禪・靈典・順高

金澤文庫資料における明恵の教學(納 富)

等に關係ある資料は、解脫門義聽集記十卷十冊・華嚴信種義聞集記殘缺四卷四冊・華嚴五教章略文義零本二卷五冊・大華嚴經疏十卷二十冊・貞元新譯華嚴經疏九卷九冊・三部華嚴等對當一卷一帖・梵網經菩薩戒本疏三卷三冊・文殊師利菩薩念誦次第第一卷一冊・如法尊勝法次第一卷一軸・一法界ソリヤ法一卷一冊の十種を擧げることが出来る。

又この外稱名寺本尊彌勒菩薩胎内奉籠物(重要文化財)中に、三寶禮の名字を記した願文二通があり、古文書中には「栴尾明恵上人行狀」の書名を出すものが一通ある。

これ等を内容から見ると、明恵自身に關係ある十三種中、自行三時禮功德義を除く他のものは既知のもので、わずかに奥書等により書寫・受容の事實を知り得る以外は注目すべきものはない。唯自行三時禮功德義には、本文の後に、俗人に對し三寶禮をすすめている明恵消息二通が収録されている。一通は假名文で女房にあてたものであり、他の一通は漢字文で、文體からして高貴な公卿にあてたものと推測される。

次に遺弟關係の十種中、解脫門義聽集記・華嚴信種義聞集記・華嚴五教章略文義の三種は、金澤文庫だけに見られる稀觀書と思われる。

まず高信撰解脫門義聽集記十卷十冊は、各卷の前表紙に「傳領湛睿」と署名があり、湛睿手澤であつたことが分るが、更にその奥書等により、明恵の講義乃至は聽集記の編纂等、その成立の經緯について觸れてみたい。このことは單に聽集記の成立を明かさばかりでなく、聽集記の性格・内容の究明に直結するからである。卷十の奥書に「貞應三年六月十八日午刻於高山寺石水院奉對上人御房談了學衆一山衆徒」「嘉祿二年四月四日於同石水院重承訓說學衆十餘輩了達房籠居之初爲彼被談之云々」とあり、又卷五の奥書に「同法兩三人聽記又兩三度集内此御物語嘉祿二年三月十八日分道場石水院也尊記有之尊記者順房記也」とあるから、少くとも二回の講義が開かれており、特に初回は一山の學衆に對して行われている。又先に擧げた卷十の奥書に續いて「已上二ヶ度記并林師令記給」とあり「法文性相者多是林師記破文料簡者多是了記一事廣記者多愚記」とあるから、義林房喜海が記録をしたことが分ると共に、各自の擔當が知られる。又卷十の奥書によると、寶治元年五月十日丹州神尾山において、首尾十二年間に亘る類集が完了し、九月十三日高山寺禪河院において清書を終つてゐる。更に卷一の奥書により、同所において切句を

十月十五日、調卷を十月晦日に終功し漸く完成してゐることが分る。このように解脫門義聽集記の成立に當つては、高信のためまざる努力によつて實現したが、喜海等の功績も忘れることは出来ない。以上のような背景によつて成立した聽集記の論述は、隨文解釋の形式で、達意的論述ではなく、隨意に問答を設定し、更には隨所に「林師云」「私云」として、喜海乃至高信自身の意見を挿入しているが、全體を通じて卑近な比喻を豊富に驅使しての講義・註釋の筆録であるから、表現されている語意は非常に平易で、しかも子細に亘つてゐるから、本文に比し明恵の思想が闡明適確に把握出来る。

次に華嚴信種義聞集記殘缺四卷四冊は、前の解脫門義聽集記が完本であるに對し、完全なるものは一卷もなく、その保存は悪い。卷二の前表紙左下隅に「智照之」とあり、右下隅に「傳領湛睿」と署名されているから、智照手澤のものを湛睿が傳領したことが伺われる。又奥書は卷二の後表紙がわずかに殘存し「于時弘安第八月廿三日於四天王寺施藥院校證了大不思議宗沙門釋智照生冊二殘」と朱書されている。智照はその前年の弘安七年に、高山寺池房に於て文殊師利菩薩念誦次第を書寫しており、又凝然に華嚴を受けていることを思うとき、智照の明恵教學に示す關心も、非常に強かつたことは想像に難くなく、信種義聞集記を手澤し校證することも故なしとしない。又湛睿は智照から本書以外に、華嚴還源觀并原人

論・大乘起信論別記・華嚴感應傳・華嚴會解記・金剛般若經論纂要等を傳領しており、或いは智照手澤の華嚴關係のものを一括して傳領したのではないかと推察される。本書も論述の形式は解脫門義聽集記と略同じではあるが、その成立の詳細な事情については知る術がない。しかし解脫門義聽集記卷四に「信種聞記第一可見之」とあるから、兩者には密接な關係があることが豫想され、又解脫門義聽集記卷六の

「此解脫門義ハ顯宗ニトリテハ深ク義ヲ得テ思惟シタル様ヲ申タル也智惠道ト云ハ信住行向地ヲ先三賢ニテユラヘタリツ、メタリシタル也」

とあるのと、信種義聞集記第一の

「今此書ハ大旨解脫門義ノ信ノ段ニ同シ……中略……解脫門義ニ觀文ノ用心ヲハ記シタルナリ觀門用心ト云ハ住行向地ヲノヘタリツ、メタリシタルモノニテアルナリ」

とを比較した場合、その格調の等しきを思うとき、その成立其の他解脫門義聽集記と同工異曲のものと云うことが出来る。このような意味において、解脫門義聽集記・信種義聞集記は、明惠の思想解明には最も有力な資料と云わなければならぬ。

次に華嚴五教章略文義零本二卷五冊は、前表紙右下に「玄通之」とあり、左下に「傳領湛睿」とあるから、玄通手澤のもの、後に湛睿が傳領したものであることが知られる。奥

金澤文庫資料における明惠の教學（納富）

書によると「建長五年五月八日華嚴興隆の爲、伴寺別所行善房草庵に隱籠し、寫本交點了ぬ。抑も此の書は義林房抄出なり。大法師聖禪」（取意）「文保二年五月五日より七月廿二日、久米多寺に於て書寫了ぬ。玄通」（取意）とあり、義林房喜海抄出を、その資で俱舎の學匠である聖禪が書寫し、それを玄通が久米多寺に於て書寫したものである。又湛睿が玄通から傳領しているものは、本書の他に華嚴勅題抄があり、湛睿と玄通は久米多寺に於て非常に密接な關係があつたようである。本書は書名によつても分るように、五教章中の問題點を取り上げ、問答體形式によつて、多くの文獻を自由に驅使し論述しており、五教章研究の資料として重要なばかりでなく、喜海は正治二年から前後十一年間に亘り、明惠に華嚴章疏全七十卷の講義を受けている關係から、本書も喜海を通してではあるが、明惠の思想探究には好個の資料である。

最後に資料に基づく明惠教學の受容の實態については、三寶禮の普及と湛睿における受容と云う二點から考察してみたい。

まず始めに三寶禮の普及については、先にあげた如く、文庫所藏の三寶禮關係資料は、三時禮釋と三時禮功德義の二點があり、三時禮釋は奥書に「嘉元四季正月十八日於相州鎌倉那多寶寺書寫之訖右翰雲□」とある如く、鎌倉多寶寺において書寫されている。三時禮功德義は明惠の撰述にかかる奥書

のみを記し、書寫についての奥書を缺くが、これは三時禮釋と同筆であることから、或いは三時禮釋と共に、鎌倉多寶寺あたりにおける書寫ではなかるうか。このように鎌倉において書寫され、稱名寺に行われたと云う事實は、少くとも稱名寺を含めた鎌倉地方の、三寶禮に對する關心を示すと共に、その普及を裏づけるものである。

次に稱名寺本尊彌勒菩薩胎内奉籠物の中、二通の願文に三寶禮の名字が記されている。これはしんくわんと蓮心の願文で、共に弘安元年稱名寺開基北條實時三回忌の年に、その一族縁者の手によつて納入されたものに含まれている。共に長文であつて、しんくわん願文は末尾に三寶禮の名字が記され、蓮心願文はその最初に三寶禮の名字が記されている。このように願文中に三寶禮の名字が見出されることは、それが願文と云う特殊なものであるにしても、三寶禮の實踐的證左として特筆すべき事で、先にあげた三時禮釋等の鎌倉における書寫と考え合わせ、鎌倉地方における三寶禮の普及を裏づけるもので、明恵の宗教的影響が非常に大きかつたことを示すものである。

次に湛睿における明恵教學の受容については、最初にあげた金澤文庫藏明恵關係資料中、自行三時禮功德義・善知衆藝童子法・阿留邊幾夜宇和附房中護律儀・解脫門義聽集記・華嚴信種義聞集記・華嚴五教章略文義・貞元新譯華嚴經疏・三

部華嚴等對當の八部が湛睿の手澤本であるが、これは資料中の主なものを凡て網羅している。又持戒清淨印明は奥書により行願房玄海から授かつており、その他梅尾明恵上人行狀の書名を載せる消息も、すべて湛睿に關係あるものである。しかも阿留邊幾夜宇和附房中護律儀は湛睿自ら書寫したもので、明恵に對する關心の深さを示しているが、更に善知衆藝童子法はその奥書に湛睿自筆で「元應元年己未十一月廿六日以紙直押三梅尾上人眞筆上寫之了」とあるから、湛睿が明恵眞筆をなぞつて書寫したことが分るのであつて、これなどは關心を超えて信仰に近いものをその間に抱かしめる。このように明恵の教學は湛睿により攝取受容されているが、このことは湛睿の教學形成における、明恵教學の密度の深さを示すものに外ならない。

以上の如く資料に基づき、明恵の教學について述べてみたが、南都佛教の影響下にある稱名寺教學中に、明恵の教學が存在することは必然の理であるが、他面において鎌倉における明恵教學の趨勢を示すものとして注目しなければならぬ。

1 田中久夫氏稿「三寶禮拜に關する明恵の消息」（金澤文庫研究五十六號所收）参照。

2 金澤文庫藏「小經藏目錄」に「五教章抄一帖義林房撰」とある。

3 高山寺藏漢文行狀参照。

4 稱名寺本尊彌勒菩薩胎内奉籠物については熊原政男氏稿「稱名寺彌勒像の胎内物に就て」（日本佛教史四）参照されたし。